

笠地藏 (山形)

むかし、ある村に、おじいさんとおばあさんが住んでいました。おじいさんは、毎日、山へ木を切りに行き、それを町で売って、米を買ってきてくらしていました。

ある雨の日のことです。おじいさんは、木を売りに町へ行きました。雨がひどくふっていました。木を売らないとご飯を食べられないので、たくさんの木を山のように背負って出かけていきました。

村はずれまで来ると、六地藏さまが、雨の中で笠もかぶらないで、びしょびしょにぬれて立っていました。おじいさんは、

「お地藏さま、お地藏さま。帰りに笠を買ってきかぶせてあげましょう。どうぞ待っていてください」といって、町へいきました。

町に着くと、おじいさんは、

「山から来た木売りのじいどござい。木はいらんかな」といって歩きました。木はたちまち売れました。そのお金をぜんぶ出して、大急ぎで笠を買いました。そして、わらわらと山へもどつていきました。

六地藏さまは、雨の中でびしょびしょにぬれて、まるで水に落ちたようになって立っていました。おじいさんは、気のどくがって、

「お地藏さま、お地藏さま。こんなにぬれて、さぞ冷たかろう。早く笠をかぶってください」といって、買ってきた笠を一つひとつ、お地藏さまにかぶせていきました。ところが、笠は五つしか買えなかったので、ひとつたりませんでした。おじいさんは、

「お地藏さま、お地藏さま。ほかには何もないので、おれのふんどしをかぶってください」といって、自分のふんどしをはずして、最後のお地藏さまの頭にぺろっとかぶせました。それから、おばあさんの待つ家へ帰つていきました。

「おばあさん、おばあさん。今帰った」

おばあさんは、

「おじいさん、きょうは、木がぜんぶ売れたみたいですね。よかった、よかった」といいました。おじいさんは、

「だが、きょうは、お金が一文ものこらなかつた。じつはな、村はずれまで行くと、六地藏さまが、雨の中で、笠もかぶらないで、ぬれて立っておられたから、笠を買ってきかぶせるとやくそくしたんだ。だから、木を売ったお金は、ぜんぶ笠代にしてしまつて、米は買えなかつた」といいました。おばあさんは、

「それはよかつた。わたしはお湯を飲んで寝ればいい。いちどくらいご飯をぬいても、なんでもありませんよ」といいました。おじいさんは、

「おばあさん。お金をぜんぶ使つても、笠は五つしか買えなかつた。それで、一体のお地藏さまには、おれのふんどしをかぶせてきたんだ。ふんどしなかぶせて、ばちが当たらないかなあ」といいました。ふたりは、心配でしたが、夜になつたので、お湯を飲んで、早くにふとんに入りました。

その夜中、ふたりは、何かの音で目が覚めました。

「おばあさん、おばあさん。外のほうでずいぶんにぎやかな音がするが、いったいなんだろう。何だか、こつちに来るようだ」

あんまり大きな音がするので、おじいさんとおばあさんは、起きだしてそつと外を見ました。すると、ふんどしをかぶったお地蔵さまを先頭にして、六地藏さまがやって来るのが見えました。おじいさんは、

（おれが、ふんどしをかぶせたから、お地蔵さまがおこつて、うちに来たんだろうか）
と思いました。そのとき、六地藏さまが歌う歌が聞こえました。

雨のふるとき 編み笠買ってかんぶせた

じいが家はどこだべな

ばんばの家はどこだべな

えいこらさあのしやあ

おじいさんとおばあさんは、あおくなりました。

雨のふるとき 編み笠買ってかんぶせた

じいが家はどこだべな

ばんばの家はどこだべな

えいこらさあのしやあ

お地蔵さまたちはどんどん近づいてきます。ふたりは、ばちが当たってもしかたがないと思つて、

「おれの家は、ここだ。六地藏さま、おれの家はここだ」といつて、戸口から顔を出しました。ふんどしをかぶったお地蔵さまは、

「そうだ、そうだ。このおじいさんだ。みんな、ここだぞ」といつて、戸をがらりと開けました。そして、入口に、車につんできたお金のふくろやら、布やら、もちやらを、みんなでじゃらんじゃらんと下ろしました。そして、

「さつきは、ほんとうにありがたかった。これをやるから、ふたりで楽にくらせ」といつて、もどつていきました。おじいさんは、びっくりして、

「こんなにりっぱな宝物をもらった。明日からは木を切りにいかななくてもいい」と、大喜びしました。それからは、ふたりで楽にくらしたということでした。

とんびすかんこ ねっけど。

原話…『萩野才兵衛昔話集』野村純一／瑞木書房

再話…村上郁